

第六号 104 から 134 までをまとめよう。

「どのような事でも月日(＝親神)が人間を思い、心を尽くして創めたことばかりである。今までは病といえば『医者だ、薬だ』といて皆心配していたが、これからはどのような痛みや悩み、あるいは悪性のできものであっても、『息のさづけ』『てをどりのさづけ』ですべて救ける。このようなことは誰も知らなかったがこれからは実際に試してみよ。どのような難しい病でも、月日の真心が込められた『さづけ』で救ける。月日が人間の心の真実を見定めて、どのような守護もすることをよくよく承知せよ。生まれた子が疱瘡や麻疹などの病に罹ることなく、また夭折することのないように暮らすことならどれほどの楽しみであろう。しっかり聞き分けてほしいのは、このような自由自在の守護を現すといても、すべて、人間をたすけてやりたい月日の心、そればかりであるということだ(104～111)。

今までも大抵のことは懇々と説いてきたが、まだ月日の胸の内を説き尽くしてはいない。この度は、月日には何かにつけて残念に思う気持ちが山積しており、その思いをすべて言っておこうと思う。このところでは人間を救いたい一心からの道を遮られて、それ相応のことを報いずにはいられない。それは大社も上流の威勢も取り払ってしまうということであり、皆の者は承知していよ。この話を何と聞いて聞いていることか。天から火が雨のごとくに降り注ぎ、海の方からは津波が押し寄せるのである。これほどまでに心配している月日の心を世界中の人はなんと知っているのか(112～117)。

こうして色々と神の思惑を懇ろに説き聞かせ、また神の嘆きの声を伝えてはいるが、人間の心さえ真に誠の心であるなら、その心次第に必ず救ける。どのような者であっても、世界中の人間は皆我が子であって、子を思う月日の心配を察してほしい。この世はすべて月日のからだであって、人間の身体はすべて月日が貸しているものである。世界中の人間が皆この真実を知ったならば、自分勝手に豪気や強欲を出す者はないだろう。月日のこの心さえ本当に分かってくれたならば、何も怖いことも危ないこともない。にもかかわらず、月日が教えることはすべて取り消してしまっ、結局残っているのは人間の心だけであるから、なんとも残念である(118～123)。

これまでもこの世界を創めた真実の話を教えておこうと思っはいたのだが。月日の心が日々急いでいても、時機が来るのを待っていることを承知せよ。この話を何と聞いて聞いているのか、月日の思惑では、深い利益を与えたいと考えているのだ。この深い利益は普通のこととは思ふなよ。これは月日が働くことであつて、遠大な意図があるのである(124～127)。

月日が自由自在の働きをすると再三説いて聞かせてはいるが、今までのところはまだ眼の当たりにしてはいない。しかし、この度は自由自在の働きを実際にして見せたなら、月日の話が真実であるとよく分かるであろう。どのような事をするのもすべて月日がする事であり、真実に人間を救きたい一心からすることである。例えば、母親の胎内へ宿すのも月日の働きであれば、生まれ出させるのも月日が世話取りをしているのである。この度は、どのような事も実際にすべて現してみせる。だから、

それを見てどのような者でも、月日は人間の心次第にどんな自由自在の働きもするのだと納得せよ。どのような事をするのも、真実の心次第に皆してみせる(128～134)

121の「ごふぎ」「ごふよく」は、『注釈』では「強気」「強欲」と漢字が当てられており、自分の我を押し通そうとする態度や、自分勝手な振る舞いとして説かれている。我を通すことと親神への信念を貫くことは似て非なるものであると頭では想像はできるが、普段の自分を省みると「我」と「親神」は容易に混同されているように思われる。

諸井慶徳によれば、ある事柄に対する否定とは、見方を変えれば、別の事柄に対する肯定である。ここでいえば、「親神」への否定とは裏を返せば「我」の肯定であり、親神の信念を貫き通すべき場面で“それを貫かない”と我を押し通しているのである。否定とは、つまり否定を含んだ“強い”肯定であるといえる。そうした自分への過度の肯定が「強気」や「強欲」という語句で示されているのであろう。

ところが、121の歌では、このような「強い肯定」こそが否定されている。それはどうすれば可能なのであろうか。その条件は「真実を知ったなら」とされ、その内容は120の「この世のすべては親神が創造し、守護しているものであり、人間の身体もまた親神から貸し与えられているものである」と詠われている。つまり、いわゆるかしの・かりもの・の教えへの納得・体感が、みずからの「強気」「強欲」を取り去る鍵だといえる。

とするならば、我を押し通しているときの自分の心は、自分の身体や身の回りのものが親神によって護られていることを軽んじて、その結果、119に歌われているような親神の人間への心配を省みず、そのときを過ごしているのであろう。親神の心配を無視してでも、みずからの思いを遂げようとする私なのである。

それでは、そうして無視しようとする親神の心配とはどの程度のものであろうか。「心配」という言葉は117でも使われており、「これほどの月日の心配を世界中はなんと知っている」と詠われて、その「これほど」の程度が115で「大社も上流の威勢も取り払ってしまう」と記されて、またその様子が116で「天から火が雨のごとくに降り注ぎ、海の方からは津波が押し寄せる」と描写されている。つまり、私が無視しようとしている親神の心配の大きさは、自分が築き上げてきた立場が失われ、自分の生活の全てが焼き尽くされたり、飲み込まれてしまったりするほどの大惨事に匹敵するものといえよう。私は自分が我を押し通すたびにそれほど大きな意志を否定しており、逆にいえば、それ相応の強さの強気や強欲をもっているのである。

たとえば火の雨や津波から人を救いだすことが容易ではないように、みずからの我執を取り去る上でもある意味決死の覚悟が必要であろう。また、それは息長く取り組んでいかななくてはならないプロセスでもある。先に記したように、その道中で鍵となるのはかしの・かりもの・の教えであり、みずからの我欲が取れてきたことの一つの現れは、自分が生かされていることへの喜びであると思われる。